



ぼくの母

大泉町立南小学校 5年 永島 琉楓

「いただきます。」ぼくは家族と一緒に食べるご飯が大好きです。特にホカホカご飯が大好きです。うちのお米は母が作っています。ぼくは群馬県邑楽郡という水と緑が豊かな町に住んでいます。ぼくの家族は江戸時代から続く農家です。祖父と祖母、おじで代々農業を行っています。おじが農業をついだと同時に母は三年前から仕事を辞めて実家を手伝う形で農業を始めました。三十代のおじが農業をついだことから、近所の作れない高れいの方がぜひ作ってほしいと頼みにきた事から所有地以外にも作るところがどんどんふえて手伝うことにしたそうです。

今年は二十七町歩、東京ドーム約六個分の田んぼに虹の煌めき、あさひの夢、ゆめまつり、彩の輝きの四種類のお米を作っています。農業に土日は関係なく、毎日仕事をします。春先四月になると我が家の忙しさはピークをむかえます。田植えの準備が始まるからです。籾ふりだけでも数千枚に及びます。そこから苗に成長させて田植えをします。二毛作で麦も植えているため、麦刈りをしながら終わったところから家族とお手伝いの人たちで計画的に植えていきます。ぼくも土日は学校が休みなので、手伝いに行きます。今年は初めて母が田植え機に乗って田植えをしました。ぼくも一緒に乗り苗をほじゅうする仕事をしました。みんなから「琉楓が手伝ってくれて助かる。ありがとう。」とほめてもらいました。正直ほめてもらえると思ってなかったので、とてもうれしい気持ちになりました。

昔の人たちは、この作業をほとんど手作業で行っていたことを考えると、助け合いの精神でみんな協力して作っていたのかなと想像することができます。「機械化が進んだ現代でも助け合いがなければ農業はできない。」と母に教えてもらいました。おじからは「農業は大変だけどむだな作業は一つもないよ。」と教えてもらいました。ぼくが手伝った作業も全て大切な作業だと。その言葉に米作りのきびしさと大変さを手伝いを通じて経験することができました。

田植えが終わったあと、ぼくは田んぼ道を自転車で走るのが大好きです。広大な田んぼ全体が太陽で照らされいなほが風でゆれキラキラ光る景色がとてもきれいだからです。少しずつ変わっていく田の風景に、祖父、祖母、おじ、母、お手伝いの人たちと今年は少しだけぼくの力が入っていると思うと、大変だったけどまたお手伝いしたいなと思いました。日々成長し秋にはたくさんのおいしいお米がしゅうかくできるのが今から楽しみです。元気に育て我がお米。